

日本のナショナリズムの論じ方

—ケヴィン・M・ドーク『大声で歌え「君が代」を』を読む—

佐藤成基（法政大学）

テキスト：Kevin M. Doak, *A History of Nationalism in Modern Japan: Placing the People* (『近代日本におけるナショナリズムの歴史——民を配置する』) (Leiden & Boston: Brill, 2007) (=工藤美代子訳『大声で歌え「君が代」を』(PHP 研究所、2009))

●著者ケヴィン・M・ドーク (Kevin M. Doak) について

略歴

1960年アメリカ生まれ

1989年シカゴ大学でPH.D.取得（ハリー・ハルトゥーニアン、テツオ・ナジタの指導の下）→ハルトゥーニアンは国学研究（*Things Seen and Unseen: Discourse and Ideology in Tokugawa Nativism*, 1989）で有名なポスト構造主義の日本史研究者。（酒井直樹も同じくハルトゥーニアンの弟子。）

2002年よりジョージタウン大学教授

主要著作

Dream of Difference: The Japan Romantic School and the Crisis of Modernity (University of California Press, 1994)

“What is a Nation and Who Belongs: National Narratives and the Ethnic Imagination in Twentieth-Century Japan”, *The American Historical Review*, 102 (2) 1997, pp.283-309

“Building National Identity through Ethnicity: Ethnology in Wartime Japan and After”, *The Journal of Japanese Studies*, 27 (1), 2001, pp.1-39

●日本のメディアでの活動

・『産経新聞』の記事「靖国参拝の考察」（上中下）2006年5月25～27日（同時期に『諸君』『Voice』にも靖国参拝に関する記事）→小泉首相の靖国参拝を奨励

・この記事の一節が安倍晋三『美しい国へ』（文春文庫、74頁）で引用される

・その後古森義久記者の記事でしばしばコメントが掲載されている（例、2008年11月2

日「麻生首相「国民主義者」と呼ぶのが適切」)

●本書の構成

Chapter 1: Representing the People as a Nation (ネーションとしての民の表象)
Chapter 2: The Preconditions of Japanese Nationalism (日本のナショナリズムの前提条件)
Chapter 3: Tennō (天皇)
Chapter 4: Shakai (社会)
Chapter 5: Kokumin (国民)
Chapter 6: Minzoku (民族)
Chapter 7: Afterword: The Place of the Nation in Japan Today (結び：今日の日本におけるネーションの位置)

・近代日本のナショナリズムの包括的研究

●翻訳の問題

・注・参考文献の削除、本文の大幅省略、訳語の不正確・誤訳、意識、新たに文章挿入（ドークは「大声で「君が代」を歌え」と主張しているのか？）→別紙参照（決して日本のナショナリズムを一方向的に肯定した本ではない。むしろその多面性が強調されている。）

・タイトルは適切か？（右翼のスローガンを思わせるタイトル。しかし著者は本の中でも“Sing ‘Kigayo’ loud!”などとは述べていない。）

「固い本に人目を引くタイトルをつけて無理な役回りを演じさせようとした試みであり、その結果は失敗である。」（アマゾンのレビューより）

----- . ----- . ----- . ----- . ----- . ----- . ----- . -----

1. 日本のナショナリズムをどう見るか

「日本のナショナリズムについて書かれてきた本の多くは、実のところナショナリズムについて何も語っていない。」

(1) 日本のナショナリズム研究に見られたバイアス

①軍国主義的バイアス

日本のナショナリズムを軍国主義や日本帝国の拡張と同一視する捉え方

②国家主義的バイアス

国家による社会生活の統合をナショナリズムと同一視する捉え方

「日本のナショナリズムの主要な物語の筋は、国家が近代日本の生活をいかにコントロールするようになったのかということという印象ある。」

「国家についての語りはナショナリズムについての語りと同じではない。」

③天皇制的バイアス（天皇制イデオロギー論）

天皇制がナショナリズムの「本質」であるという捉え方

「天皇制はナショナリズムと同義ではない。」

（2）「民を配置する」の企てとしてのナショナリズム

■ナショナリズム→民を配置する (placing the people) 政治的・文化的企て→日本の“民”がどのように認識され、共通の連帯感情をもつものとして表象されるのか

「ナショナリズムは民 (the people) を政治生活における特権的原理として主張する原理である。……それはまた、個人および集合体のアイデンティティの中心へと向かう文化的主張でもあり、またそのようなものとして自らを国家との対立的な関係に配置することがありうる。」

「ナショナリズムのダイナミクスを理解するためには……、われわれはまず、国家の名によって掲げられている主張なのか、ネーションの名によって掲げられている主張なのかの違いを認識しなければならない。とくにネーションが、いかにして民 (the people) を、国家には必ずしも当てはまらないしかたで文化的・政治的過程にとっての特権的な主体として配置 (configure) していくのかということを知識しなければならない。」

■様々な「民」の理解→「国民」「民族」「大衆」「民衆」「市民」「人民」等々→どのようにナショナリズムが理解され、喚起されていくのか

（3）「対立的ナショナリズム」

■日本のナショナリズムは単一ではなく複数、かつ対立的（「対立的ナショナリズム」）

‘Japanese nationalism was, and still is, ... a “conflictual nationalism”.’

■国民国家が制度的に欠如した歴史

- ・ 明治国家：制度的に国民国家 (nation-state) でない（君主国家→多民族帝国）→「国民国家」を目指そうとする上からの企ては抵抗にあう（人民主義的「民族主義」の抵抗）
- ・ 1945～52：日本の国家が存在せず→「国民」の弱さと「民族」ナショナリズムの持続⇒ナショナリズムのディスコース内での対立（国家対ネーション、「民族」か「国民」か、エスニックかシヴィックか）

「近代日本におけるナショナリズムの複雑で対立にみちた歴史は、ネーションとしての民が誰なのか、その政治的展望はどうあるべきなのかについて、多種多様な解釈を発生させたからである。多民族帝国の発生、戦争中の連帯の必要性、占領期の日本国家の崩壊、戦後憲法の下での「国民」としてのネーションの公式上の再構築などの広汎な歴史的諸事件が、ナショナリズムを方向付け、多様化するのに必要な役割を演じた。」

■論争的場

「[日本のナショナリズムは]、民族性 (ethnicity)、天皇への忠誠、政治的国家への忠誠、

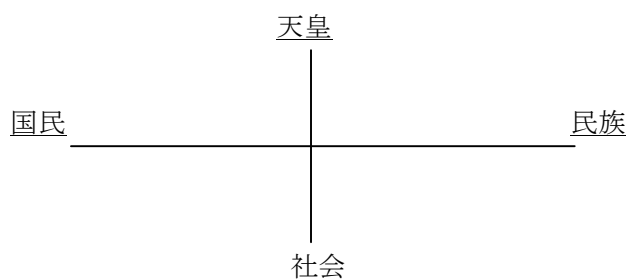
アジア的伝統主義、親西洋的個人主義などを含んだ、様々な対立するナショナリズム的主張の争いの場なのである。……日本のナショナリズムは、特定の一連の歴史的・政治的諸事件の結果である。それは論争場において多様な担い手 (agents) を作り出す。それぞれの担い手はネーションの名において他の担い手を駆逐し、抹消し、横領しようとする。」

(4) 日本のナショナリズムを構成する四つの基本要素

■四つの「建築資材 (building blocks)」→「天皇」「社会」「国民」「民族」

「日本のナショナリズムのディスコースは共通の主題 (天皇、社会、国民、民族) をめぐって構造化されている。」

→それぞれの概念が歴史的に変化 (超歴史的=分析的概念ではない)、相互に結節・反発



2. 場の設定 —不完全な国民国家—

■ナショナリズム発生の触媒 (catalyst) としての「公議 (輿論)」

・ペリー来航や西洋列強の脅威→尊皇攘夷運動 (=ナショナリズム) →明治国家 (=国民国家) 建設という従来の説明 (「外圧」→ナショナリズムの「玉突き」理論) からの決別
⇒「公議 (輿論)」への注目: 次第に包括的になる公議 (大名→武士) →佐幕派 (公議政体論)、討幕派、維新政府 (五箇条御誓文、議政官、公議所) によって動員→ネーションとしての民の概念化の基礎

・武力による廃藩置県→「公議」を唱えていた政府のメンバーが政府を離れる→「民権」「民撰議員」の主張 (中江兆民、大井憲太郎、宮崎夢柳ら非薩長系の人々←民法学の箕作麟祥、フランスの政治理論)

・明治14年の政変 (1881) →政府がプロイセン型国家中心主義の憲法案へ→帝国憲法 (「国民」の主権を否定し天皇主権、「臣民」) →立憲君主制・非国民国家

⇔「ネーション」(国民) (民権派、私擬憲法)

→国家对ネーション (民) という場の形成→国家とネーション (民) の関係をどう捉えるのか→様々なナショナリズム

「最初、国民主義者 (kokuminshugisha) は国家の権威を受け入れはしたが、それを彼らの主要な関心にとっては周辺的なものとして放逐してしまった。彼らの主要な関心とは、

一つの民 (a people) としての日本人の本質に関わる問題である。その後 1910 年代から 1920 年代にかけて、国民主義者の何人かは、ナショナルな感情を国家と政府の権力を美化する国家主義 (kokkashugi) のドグマを攻撃するために用いた。」(「日本のナショナリズムの最も簡潔で信頼のおける分析」である Thomas R. H. Havens, “Frontiers of Japanese Social History During World War II,” (1973)から)

3. 天皇制とナショナリズム

「近代日本のナショナリズムにおいて天皇の役割を完全に理解するには、ナショナリズムを天皇や「天皇制」に単純に還元するのでは不十分であり、天皇とナショナリズムの関係性についての幅広い議論に熟知しておくべきである。」(これまで日本のナショナリズム研究において天皇制をめぐる議論が支配的であったこと→「真のナショナリズム」の弱さ)

■天皇制はナショナリズムを昂揚させると同時に抑圧する (適合性と対立の両面)

・尊王論 (国学、水戸学) →天皇と日本の民の一体性、日本人民の救済者としての天皇を強調

・薩長系・華族に列せられた人々を中心にした政府による憲法制定 (1881~1889) →「臣民」の規定

⇒天皇と国民・人民の隔離→天皇と国民の関係性をめぐる様々な論争

・「国家主義」: 天皇への忠誠を機軸にした国民道徳 (教育勅語) →キリスト教徒からの批判 (天皇が国家の主権者であるが国民道徳とは無関係→道徳は「国民」から)

・日比谷焼き打ち事件 (1905) 以後→国家・天皇・帝国と「民」の亀裂深まる→社会主義の波及 (幸徳秋水…反国家・反天皇、北一輝…天皇は国家の一機関、「国民の天皇」)

・明治天皇の死 (1912)、大正政変 (1913) →護憲運動・大正デモクラシー→天皇に代わって「人民」が政治的正統性の源泉

・戦後憲法での象徴天皇制 (民主主義の国民主権と天皇制の調和→「天皇制の国民化」) ⇔ 右翼ナショナリズム (日本古来の天皇→戦後憲法との矛盾→しかし現天皇が戦後憲法を支持→衝撃)

4. ナショナリズムと社会の想像

■日本の民をトータルに捉える概念として社会→社会対政府・国家との構図においてネーションと等価・代替的機能

「日本の近代史を通じて、「社会」は「ネーション」の婉曲概念として働いてきた。……「社会」や「社会学／社会科学」をめぐる論争は、実のところ「ネーション」の意味、範囲、政治的意義をめぐる論争であったのだ。」

「天皇制の諸制度よりも社会の想像 (social imaginary) の方が、ナショナリズムにより近い。」

⇒社会の想像を通じたネーションの把握→対国家

・日清戦争後：「社会問題」「下層社会」「社会主義」「社会民主党」等→「社会」の名における行動

・1918（第一次大戦終結）後の「社会」のカムバック：社会主義の大山郁夫、社会学の高田保馬、関栄吉「基礎社会としての民族」→「民族」⇔国家・資本主義

・占領期の改革→国家と社会の分離進む→「社会」「人民」「民族」の結びつき（共産党）

・「市民社会」からの「国民」構築の試み（丸山真男等）、清水幾太郎→人民の国家への正しい態度を強調

・安保闘争の「市民」→反国家の文化を助長、消費社会→社会の政治的側面への関心低下

・近年の「社会」への関心復活？（→「健全な民主主義の発展」にとって望ましい）

5. 「国民」ナショナリズムの困難

■国民主権を要求するシヴィックで民主的なナショナリズムとしての「国民」ナショナリズム

・明治初年の「四民平等」「文明開化」「封建制からの解放」→民（「人民」、「国民」）を政治の中心に配置する企て（新聞・演説を通じて「公論」に訴える）→憲法制定過程で薩長藩閥政府に対して「国民」の主権を要求（「国民」対「臣民」、フランスの政治理論対ドイツの政治理論、国民主権対君主主権、中江兆民対井上毅）

・キリスト教が「国民」ナショナリズムで果たした役割（小崎弘道、千葉卓三郎、植村正久など）

・憲法制定（1889）以後の「国民」ナショナリズムの文化ナショナリズムへ（徳富蘇峰と民友社、三宅雪嶺、志賀重昂、陸羯南→文化概念を通じた「国民」の理解）→「民族」（エスニック）ナショナリズムへ（20世紀前半「国民」ナショナリズムは退潮、「民族」ナショナリズムの優勢）→国家とネーションの亀裂進む

・1937年以後：国家への忠誠心により「国民」の動員（国民精神総動員運動、国家総動員法）→国家と「国民」の一体性を回復する企ては完全には成功しない

・戦後憲法で初めて「国民」が登場→「国民」ナショナリズムは障害にぶつかる（「民族」ナショナリズムの持続、安保以後の「反国家」的文化、1970年以後のナショナリズムの非政治化）

・1990年以後の「国民」ナショナリズムの復権（単一民族主義が乗り越えられるのか？）

6. 「民族」ナショナリズムの昂揚と持続

■エスニックナショナリズムとしての「民族」ナショナリズム

・発生は「国民」ナショナリズムの後（1880年代に志賀重昂の「大和民族」、しかし「民族」概念が広まるのは1890年以後）（高山樗牛、井上哲次郎）

・帝国憲法における「臣民」の「国民」に対する代用への挑戦→真のネーションは精神や心に宿る（ネーションのロマン主義化）

- ・多民族帝国下での民族概念の配置をめぐる対立（混血民族説か日本民族の優越か）
 - ・第一次大戦後の「民族主義」→左派・リベラル知識人における「民族」ナショナリズム（「民族主義」対国家主義、帝国主義、資本主義、「国民主義」）（阿部二郎、矢内原忠男、大山郁夫、長島又男等）
 - ・多様な「民族」をめぐるディスコース（1925～1935）：「このような「民族」への広汎な関心が引き起こした結果は、日本のナショナルな一体性の高まりではなく、「民族」とは何を意味するのかをめぐる分散され、論争的なディスコースであり、「民族」の主張に対して日本の人民（people）がどのように応じるべきかについての広汎な不都合であった。」
 - ・1935年以後：日本浪漫派の文化理論（保田與重郎、亀井勝一郎）、人類学者の民族研究（高田保馬、岡正雄）、帝国支配のショーアップ（「民族協和」）
 - ・「大東亜」と民族→諸民族の共存共栄（亀井貫一郎）か「東亜民族」（高田）か
 - ・敗戦後も「民族」ナショナリズムは公然と表明され続ける（国家なき民族）（南原繁、新明正道等）
- ⇒「民族」ナショナリズムの持続（しかし国家との亀裂も持続）
- ・共産党の「民族主義」「民族独立」→反アメリカ帝国主義、反資本主義
 - ・保守主義の「民族」ナショナリズム→国家の平和な代用としての「民族」
 - ・1970年代の「日本人論」→「民族」が政治から切り離される
 - ・2000年代に入っの「民族」ナショナリズムの退潮→新しい「国民」ナショナリズム？

7. おわりに

ードークが提起する日本のナショナリズムの論じ方ー

- ①「国家主義」「天皇制イデオロギー」「軍国主義」「超国家主義」「単一民族主義」との宿命的結びつきから「日本のナショナリズム」を解放
- ②単一のナショナリズムではなく複数の対立するショナリズム（上下左右の多様性と対立関係の織り成す場）

…Carol Gluck（アメリカ）や小熊英二などの最近の流れにも共通する視点

→ナショナリズムはその意図するところとは違い、国民国家・国民社会の一体性や連帯を促進する機能をもつわけではなく、むしろ国内の分裂を深める側面もあるという逆説

- ③「民を配置する」企てとしてのナショナリズム（そこで天皇、社会、国民、民族概念がどのように理解され、用いられているのか）

→「ナショナリズム」の領野が広がる（恐らく自他共に「ナショナリスト」とは認識されていない人物や思想も含まれる）

例）吉本隆明：「戦後最も影響力のあったナショナリストの一人」（p.198）→不定形で定義不可能な「大衆」概念に根ざした「無政府的ポピュリストの一種」である「亜曖昧な種類のナショナリズムを唱導した」→吉本は「ナショナリスト」なのか？（ナショナリズム批判者でもある）

④国民国家の歴史的不完全性、ナショナリズムの断片化、および「国民」ナショナリズムの弱さという視点（国家主義や「民族」ナショナリズムの優勢）

→「健全な」民主主義の発展の障害

⇒近年の「ネオ・ナショナリズム」（小泉純一郎、安倍晋三、佐伯啓思、桜井よしこ，等）への評価

⑤日本における「シヴィック・ナショナリズム」の可能性を探求（果たして本当に可能なのか？ 小泉や安倍の「ネオ・ナショナリズム」は「国民」ナショナリズムなのか？）